
<回 想>
エルエフ会

2018年1月

目 次

エルエフ会創設のころ	小林功……………	1
エルエフ喪友録	有岡恭助……………	4
私の臨死体験について	内海孝雄……………	7
エルエフ会へ感謝と若干の回想	岡野久雄……………	12
筆谷尚弘君のこと	岡部陽二……………	15
エルエフ会との繋がり	小笠原幹治……………	17
田舎に住む 2017年の終わりに	小林功……………	19
エルエフ会関西は木曜会	小林太郎……………	21
エルエフ会を維持された方々への感謝	柴田徹一……………	23
エルエフ会と六本木の思い出	宅間正夫……………	24
エルエフ会の思い出	谷本健治……………	27
エルエフ会の思い出と今後の生き方	寺西昭夫……………	28
住宅管理組合の経験	野々内隆……………	29
寛容で温かな集い	三露久男……………	31
エルエフ会番外編	吉田勝昭……………	33
エルエフ会の歩み……………		37
会員会会員異動……………		40
編集後記……………		42

エルエフ会創設のころ

小林 功

サロンXという仮称でエルエフ会が発足したのは1975年9月11日のことでした。それは野々内君の、何かおもしろいこと始めようじゃないか、という発言がキッカケでした。それから1995年12月8日の第180回例会まで、野々内君、故筆谷君と3人で幹事を務めました。この期間を第1期と呼ぶならば、それは二つの時期に分かれると思います。

第1期前半は1981年6月26日までです。この期間はほとんどが京都大学出身者で構成されていました。例外は後藤政弘、柴田徹一のお二人だけでした。同窓会に出ると、このエルエフに参加したいという方が少なからずあり、これは同窓会ではないということを説明して、それでも入りたいという人をどうするか考えたものでした。創設の時から、この会は、様々なバックグラウンドを持つ同世代の集まりで楽しい勉強の場にしようという合意がありました。このままでは極めてホモジニアスな閉鎖的な集まりになってしまうのではないかという危惧を持ちました。それで7、8月の夏休みの後、9月28日の第56回例会で、エル・エフの運営についてという議題で意見交換しました。その結果として在来の会員4人が退会、2人休会、新たに7人の入会が決まりました。この時の新参加は次の諸君でした。

井ノロ 誼	東京芸大	いすゞ自動車デザイン部長 (故人)
堀 佑四郎	早大・鋳	小野田セメント資源事業部次長 (故人)
内海 孝雄	東大・工	富士通主管研究員
村山 登	東大・工	リコー技師長 (のちに退会)
平野 皓正	京大・経	アーサーヤング会計事務所 (のちに退会)
佐野 清次	京大・経	三井物産財務部次長 (故人)
武谷 信義	京大・経	旭化成エンジニアリング樹脂販売部長 (故人)

この人事は、主として私の選考によるものでしたが、少しは従前の色合いを薄め、特に理工系のメンバーを増やしたことに意義があったと思っています。

第1期後半は、これらの新しいメンバーによるスピーチもあり、1982年8月の沖縄旅行をはじめとして各地への視察旅行、絵画同好会の発足などもありました。少し遊びの空気を入れようという趣旨でした。尾瀬への一泊旅行は天候に恵まれ、会員知人の女性数名の参加もあって東電小屋も利用できました。お世話いただいた川崎君がながらく休会中とは残念なことです。

エルエフに先立って、もう一つの月例夕食会を大阪で始めていました。

私が会社を創設したのは1974年7月でしたが、当時は田中内閣の末期、堀江謙一の単独無寄港世界一周275日という快挙もありましたが、GDPは戦後初

初めてのマイナスを記録した年でもありました。翌年には統一地方選挙で東京、神奈川、大阪で革新系の知事が当選、大阪では憲法学者の黒田さん、与党は共産党のみという状況でした。終戦後、母方の親戚を頼って天津から大阪、旧布施市（現、東大阪市）に引揚げ、中学・高校・大学の10年間大阪にお世話になったこともあり、大阪府企画室に毎年ペーパーを書いていた。知事は共産党ではないし、決して偏った考え方ではなく、職員にも信頼されていましたが、経済界との関係を懸念する声も強かったのです。そこで、企画室長の西村さん（のちに副知事、関西空港を推進）と相談して、大阪府、市の企画部門の若手と大阪の有力企業の企画部門の若手が、月に一度集まって懇談し、信頼関係を醸成しつつ、大阪の未来に備える議論を始めることで合意しました。最初の6か月は企画室で会場を無償提供するということになり、その結果、内本町のコクサイホテル役員応接室で毎月1回の夕食会が始まりました。

この時のメンバーは大丸、阪急、近鉄、松下電器、竹中工務店、関西電力、大阪ガス、開銀、興銀、長銀、住友重機、日立造船、住友電工、日本生命、住友金属、東洋紡績、三菱商事、島津製作所、三和銀行、富士フィルム、太陽工業、サクラクレパス、帝人、大阪商工会議所。

命名は私の提案により、櫟友会、となりました。櫟は役に立たないから伐られずに大木となるということから、役に立たぬ連中が第3木曜日に集まって楽しむ集い、という趣旨です。

その第1回は1975年8月27日でした。第2回は9月18日でしたから、サロンXは半月ほど遅くスタートしたわけです。当時、異業種交流という語はまだ流行っていませんでした。

1975年にはロッキード事件が表面化し、折からの不況で財政特例法を作って初の赤字国債を発行するなど、日本は問題を抱えていました。田部井淳子さんエベレストの女性としての初登頂、ウインブルドンで沢松和子さんダブルス初優勝という快挙もありましたが、翌年には田中前首相の逮捕、河野洋平の新自由クラブ発足、天安門事件、毛沢東死去など内外ともに不安定な時期だったと思います。そのさなかの6月25日、11人が集まり名称、幹事、会則を決めて正式にエル・エフ会として再スタートしました。その時のメンバーは以下の通りです。

阿部 統	東工大社会工学科教授	小川 弘	三菱重工
野々内 隆	通産省	西岡 稔	商船三井
光岡 義郎	大和証券	廣岡 良彦	住友化学
筆谷 尚弘	アイ・エス・エス	後藤 政弘	日本アジア航空
川崎 弘	通産省	小林 功	環境計画
小林 太郎	大阪ガス		

欠席者は以下の4名でした。

小林 實	日本興業銀行	雑賀 正平	三和銀行
寺田洋三郎	名神汽船・正和海運	中根 正節	日本経済新聞

出席率平均 60%と想定し、会員数をほぼ 20 名に限定し、希望者はウェイティング・リストに上げ、会員 2 名の推薦によって空席があれば入会というルールも決めました。会場を霞会館に固定できたことも好都合でした。そのお蔭とも言えますが、のちに筆谷君の紹介で、会終了後に歩いていける「荒井」で遊べたのも今では懐かしい思い出です。寺田君が小唄の手ほどきを受けたのもこの荒井のおよねさんからでした。某日、暇だから付き合ってくれと頼まれて、渋谷で食事の後、六本木に戻って彼女の妹分のお店で飲み直し、そのあと、ボトルキープしていた店でバーボンと音楽を楽しみ、深夜まで遊んだこともありました。およねさんはその後、店をたたんで、信州のお母様の世話をするために東京から離れたのですが、今では音信不通になってしまいました。もう 20 年あまりも経過していることもあり、筆谷君もいなくなって確認のしようがなくなっています。もし東京でご健在ならば有志と図って再会・懇談の場もと思ったりします。

私が会社を後進に譲って北海道に移住すると決めた後、エルエフの終了を相談したところ、野々内君はこれからは重要だと存続の強い意向でした。そこで、第 180 回 1995 年 12 月 8 日の例会で、新しい幹事団の構成を求め、翌年 1 月の例会で、川崎、西岡、寺西の幹事 3 氏により、第 2 期がスタートすることとなったのでした。

この会がこのように長く存続してきたことにあらためて感慨を覚えています。歴代幹事のみなさんや会員の皆さんのおかげです。そのことに感謝し、創設の当時を回顧して駄文を弄しました。これからは場所も運営も変わるそうですが、機会に恵まれれば、そこにも参加させていただきたいと思っております。ありがとうございました。

-

エルエフ喪友録

有岡恭助

エルエフ会は、もともと京大経済学部昭和31年卒業生の有志が阿部統先生を中心として、創設された会で、初期の幹事役を小林功君が務めておられ、私は彼に誘われて参加させていただいた。その後メンバーは、出身校や世代を越えて広がった。

どなたも温厚な紳士揃いで、毎月、顔を会わせ、ときには、一泊や日帰りの周遊を楽しみ、私の人生に潤いを与えて貰った。多くが同世代だけに、残念なことではあるが寄る年波に亡くなる人も増えた。私もいずれ後を追うことになろうが、この機会に懐かしい思い出を書き留めておきたい。

雑賀正平君と私は、大阪岸和田の旧制中学校、新制高校の同級生であった。彼は在学中、健康を損ねて1年遅れ、私も1年浪人したため、学部は違ったが、京大も同期生になった。奇しき縁というべきか。

ご承知の通り、彼は長身で、精悍な風貌の秀才であった。私たちは、新制高校の実質1期生で、米軍政部の指導で生徒自治会を組織することになったが、高校1年のとき、彼は前期、私は後期の副会長に選ばれた。さらに、彼は翌年前期に、2年生ながら会長に立候補し、選出された。万事に積極的な性格で、自治会長として、応援団の結成、生徒食堂の設置等を公約し実現した。そのほか、生徒集会でロシア民謡を独唱し、学校新聞にゲオルギウの「二十五時」の書評を寄せ、また「女生徒への公開状」で、「女生徒は因習にとらわれず、男女同権を自覚し、積極的に行動せよ」と訴えて女生徒の間に少なからず反響を巻き起こした。

京大時代は、東山の下宿を訪ね会い、友人を混えコンパをした。私は最初のうち、大学新聞等に関係し、いわゆるリベラル派だったが、次第に保守化した。昭和30年、学生自治会である同学会が滝川総長を監禁し総長室に座り込んだ事件があり、私はこの事件の批判を朝日新聞、毎日新聞に投書したことがあった。法学部の各ゼミは、私の主張に賛成してくれた。これに対し、経済学部のゼミは反対で、雑賀君はその代表者として対立し論争した記憶がある。

大学を卒業すると、彼は三和銀行に入り、国際畑を進んだ。立石康則というジャーナリストが書いた「三和銀行香港支店」に、実名で彼の活躍ぶりが紹介されている。1964年、開設されたばかりの香港支店に入行7年目の彼がロンドン支店から転属、支店長に自論を主張しながら中国銀行に接近、円元決済問題を働きかけた。さらに7代目支店長として香港に再赴任するや、中国ビジネスの開拓に尽力した。このため三和銀行は邦銀の先頭を切って経済特区に事務所の開設が認められた。

雑賀君はロンドン支店長、専務取締役を務めたあと、系列の今橋地所の社長に

転出した。たまたま私が四国電力を辞めサハリン石油ガス開発を引き受けた頃で、事務所も近かったのでときどき会って知恵を借りた。

惜しくも 60 台の若さで逝去し、護国寺で盛大な葬儀があった。

根来泰周君は、京大法学部の同期生である。ただし、教養時代のクラスやゼミが違っていたし、彼が法律相談部の中心であったのに反し、私は大学新聞などに熱中し、接点はあまりなかった。しかし、4 年生になって就職先が決まると、京大の官界へ進む者が少ないこともあり、自ずとお互いを意識し、グループが生まれ、急速に親しくなった。散策や食事をともにするようになった。彼は和歌山市の向陽高校の出身で、私も大阪の南部に実家があったため地域的な親近感もあった。そのうち、問わず語りに彼の実家が本願寺派のお寺で、彼に僧籍があり、御経もよめると聞いて驚いたりした。

若い頃は、赴任地も離れていたが、勤務地が東京になると集まる機会もふえた。彼に時事問題について尋ねると、いつもハッとするような示唆に富んだコメントを呉れた。子供の結婚式に列席して貰ったこともあった。

彼は、法務省の官房長、刑事局長、次官と出世コースを歩んだ。

平成 3 年、私が四国電力にいた頃、根来氏はじめ京大同期の検察の仲間、警察の大高氏、岐阜県知事の梶原氏、日銀の岡田氏等と一緒に文芸春秋のグラビアに載った「同級生交歓」の写真是大切なモニュメントである。

彼の腕っぷしは頑丈で、ゴルフもよく飛んだ。この頃のスコアカードを探したところ 2 枚見つかった。平成 3 年、千代田で 53, 51、平成 5 年、私の四国在勤中、高松へ一泊で来てくれた時は、志度で 52, 56 のスコアが残っていた。

彼の法務省高官時代のことだが、私の亡くなった母の名が変体仮名であったため、戸籍簿でひらかなにされ、納得し兼ねたことがあった。こんなことにも、彼は快く、親切に相談に乗ってくれた。

東京高検検事長のあと、彼は、やや畑違いの公正取引委員会委員長を見事に勤めあげた。その後、思いがけず、プロ野球のコミッショナーに就任し、ドーピング検査の実施、暴力団排除等プロ野球界健全化に尽力した。彼はもともとタイガースファンで、奥様の話でも、この時代が人生で一番楽しかったようで、WB で日本チームが優勝したときは、背番号 17 のユニホームを作って貰ったそう。

亡くなる 3 年ほど前から肺を患っていたが、抗癌剤で落ち着かせ、奥様と国内旅行をしたり、霞会館の L F にも青山のお宅から徒歩で通っていた。死後、年改まり、築地本願寺で盛大な本葬があった。彼は、「平生業成」という親鸞の教えを愛していたが、この世で彼が達成しようとした大きい人生の目的は、果たして何であったのだろうか。

このように、雑賀、根来両氏とはとくに親しかった。親疎の差はあったが、他の諸氏ともエルエフ以外でもなにかと交流があり、懐かしい思い出が尽きない。

佐野清次氏は、大阪出身で、大学時代は演劇部で活躍し、エルエフに在籍した疋田郁子さんと共演したこともあり、当時から私も交遊があった。

私が通産省に入り、数年して大蔵省に出向し、為替管理を担当した頃、三井物産の担当者として、よく顔をあわせた。そのうち彼はロンドンに赴任した。昭和42年、私が家族同伴でローマの大使館に赴任する途中、ロンドンに立ち寄った際には支店長とともに空港に出迎えてくれて、車で一日、ロンドンの名所を案内してくれた。機中で眠れなかった家族が、車内で眠りこみ、申し訳なかった。彼にはそのごニューヨークに出張したときにもお世話になった。

西岡稔氏は、商船三井の役員を経てダイビルの特務を務め、2回にわたり私の会社の大家さんになった。すなわち、私がサハリン石油ガス開発を引き受けたときは、彼の斡旋でダイビル九段ビルに事務所を移した。ついで大阪中小企業投資育成の本社は、ダイビル中之島ビルにあった。彼はまた、私に古い宅地のアパート賃貸を勧め、業者を紹介してくれたこともあった。また横浜みなとみらいの高層マンションのお宅に招き、瀟洒な内部の間取りなど詳しく案内してくれた。みなとみらいの海岸を散策し、洒落たレストランで歓談した半日は忘れ難い。

宗像昭雄氏は、私の妻の姉と小中学校の同級生だったそうで、秀才ぶりはよく聞かされた。しかも彼は私の大学時代の友人平塚氏の妹と結婚、義姉になった人は私の絵の会の仲間でもあった。彼は、晩年、係累に先立たれたが、テニス等に打ち込んで、明るく元気に過ごしていた姿が印象に残っている。

筆谷尚弘氏がオーナーの会社は九段にあり、会社が近かったので、近所の有名なレストランや鰻屋などを教わり、一緒に食事したことも何度かあった。彼の令息と私の長男は高校、大学の同級生である。彼は晩年、体調を崩し、エルエフ会にも奥様同伴という時期があったことは皆様ご記憶であろう。

私の臨死体験について

内海孝雄

突然ショッキングな題材で心苦しいが、最近実際に起ったことであり、またL F会の親しいメンバーがポツリポツリと亡くなる事もあり、敢て、この話を簡単にまとめることにした。

本題に入る前に、エルエフ会入会の動機などについて少し述べようと思う。

エルエフ会には”異分子“を入れたいと言って誘ってくれたのは小野田セメント同期の小林功君で、長女京子が小6になったのを契機に帰国を決意してベル研究所主任研究員をやめ富士通に就職して2~3年経ったごろ;70年代の終わりころだったと思う。

京大経済学科のゼミの仲間達ということで初めて出てみると、安部先生はじめメンバーの面々が東大の文系の連中に比べて”ソフトタッチだなー“というのが第一印象だった。機会があれば会に出ることとして、その後は出るたびに京大の雰囲気を楽しんでいた。

アメリカには元々文系、理系という区別は社会的にも個人的にもなく、専門分野は何ですか?と聞くまでは分からないというのが極く当たり前なので、皆の思いは別にして、自分自身が”異分子“であるとか、肩身が狭いというような感覚はなかった。小林功君は小野田で出会った20数人の同期の一人だが、最初から気が合ったのか一生の友達となった。

小野田セメントは今では見る影もない会社だが、当時は安藤豊禄という極め付きのカリスマ性のあった経営者が社長で、日本で最初にIBMのコンピューターを大々的に導入し、日本で最初にゼロックスマシンを入れ、斬新的な調査部門を作り、当時は三白景気という時代背景もあり豊かで元気のいい会社だった。

電電公社、国鉄、NHKなどの公共事業体はじめ民間の大企業が列をなして計算機の勉強に、ソフトウェアの勉強に小野田社を訪れていた。採用人事の面でも目立ったところでは1年上に通産次官の息子の山本武彦(その後独立して自動翻訳機のブラビスインターナショナルを設立)、1年下に仁科芳雄の次男仁科浩二郎がいた。

私は増田閃一顧問(のちに東大電気工学科教授になり静電気学会を創立した)という大先輩と一緒に仕事をするようになるが、4~5年経って彼の勧めで、1年先に東大電気から留学していた石丸節夫氏(のちに東大物理学教授となる)のいるイリノイ大学に行くことになり小野田を退職した。

このため、当時、隆盛を誇った会社が何故凋落していったかの詳しいことは分からないが、その原因の主な部分はやや逆説的だが安藤社長のカリスマ性にあるような気がする。それも極めて日本的なカリスマ性である。業界No.1を自

他ともに認める日本セメントを打ち負かしたい執念で技術論的には革新的な新しいセメント焼成法に切り替えるために全社のリソースを投入した結果これに技術的にはともかく事業的には成功しなかったためだ。彼（東大化学出身）の技術への自信とカリスマ性のため誰もブレーキをかけられなかったのではないか？ 同じカリスマ性でもアメリカ的にやればM&Aもあり、キーパーソンの引き抜き・外部人材の採用・登用という手で多角化出来たかも知れない。

キャノンはこのアメリカ的手法に近いやり方でたで一介のカメラメーカーから多角化に成功し先輩格のニコンを追い越したし、富士通の場合は池田さんという天才肌のコンピューター技術者と彼の守護神であり対 IBM 戦略でアメリカ人の心が分かる尾見半左右という老獪かつ人格的にすぐれた経営者が基本的な路線を引いたことで兄貴分だった日電を追い抜いた現在がある。

さて、ここからは徐々に本題に入ることになるが、事の発端は昨年(2016)の初夏の頃、五十年以上も会ったことがなかった小野田の元部下の安藤君からの会いたいという連絡だった。

彼は2~3年下の入社で東工大電気出、同期に京大数学科出の内田君がいた。この二人に他二三人を加えて、こともあろうにセメントとは何の関係もない量子論の中でも難解中の難解といわれていたDiracの The Principles of Quantum Mechanics という本の輪講をやっていた。常識的に考えればこれは会社のためには何の役にもたらず、社会人になった以上時間の浪費と言われるかもしれない。また、今どきのご時世ではこんな事をやる人間はそもそも何処にもいないだろう。しかし今の自分はこう考えている。

人間はある難しい問題にぶつかり苦勞の末にそれが解けるとその瞬間この世界の全体がより良く理解できたかのような感覚に襲われることがあるものだ。勿論これは幻想にしかすぎないし特に若い時に多い感覚なのだが、一度この味を占めるとこのスリルが忘れられなくなり、さらに難しい問題にチャレンジしたくなるものだ。

輪講の問題はさておいても、人間の若き好奇心がこのような感覚に引きずられて時には世界を変革するような大発明や大発見が行われたのは事実であると思う。たとえばニュートンが万有引力や慣性の力学を発見し、地球をふくめた天体の動きを完全に理解できたと思った瞬間、彼は宇宙の出来事のすべてを理解した感覚にとらえられたに違いない。勿論これは現代の科学からすれば幻想にしか過ぎないが、こういう幻想感覚の連鎖が時と場合を得て世の中を押し進めてきたのは間違いがないとおもわれる。

ところで安藤君の用件とは、最近自分は英文の定冠詞と不定冠詞を使い分け

る法則を見付けたのでこれを本にして出版したので一度内海さんに会ってお話したいということだった。

彼とは小野田以来会っていないのでビックリしたものだが、安藤君といえども思い出すのは輪講のことであり、彼はかれなりにあの当時の知的刺激を追いつつて”英文を書くとき日本人なら誰でも迷う定冠詞か不定冠詞かの問題“に彼なりの解を見付けたものと理解し、賞賛した。当時何か理由が分からないが体調が良くないのを承知で7月4日に外人記者クラブのダイニングバーで会うことにして、食事を挟んで延々3~4時間の楽しい長丁場となった。

家に帰りその晩は食欲がなく漠然とTVで錦織の試合を見ていたが勝ち目がなさそうなのでスイッチを切り便所に行った。夜中の12時頃の事である。すると、まるでトマトケチャップのような血便が大量に出てきた。10分間ほどたちまた行くと同じような血便だ。パジャマのズボンも血でべしょべしょだ。

これはかなり深刻な事態と感じて近くの長女京子に電話した。30分後に飛んできた京子と孫に、時間帯とマンションの事を考えタクシーを呼んでくれという私の要望に、語気を強めて救急車でないとだめですという京子とのやり取りまではハッキリ覚えているが、記憶はそこまでで慶応病院に担ぎ込まれたところやその後の事は全く記憶から抜け落ちている。

従ってここから先に何が起ったかは後々聞いた話が元になるが、輸血をいくらしても血圧が遂に60/30となり、先生たちは京子たちに“覚悟するよう”にと言っていたそうだ。一方、私の方は気を失った瞬間から何が起こっているか全く分からなくなるものの、気分的には痛みも息苦しさもない静かなものだが、時間感覚は完全に喪失していたようだ。

意識はというと、意識が全くない時と極く僅かながらある時と揺れ動いているようだったと思う。数人の若い先生と数人の看護師さんたちが元気に声を掛け合いながら動き廻るのがぼんやりと分かる瞬間もあった。

突然主治医らしい先生が意識朦朧の私に向かって怒鳴るような声で言いました“内海さん、死か、腎臓か、どちらかを選んでください！ 出血場所が分からないので造影剤を使いたいですがこれは腎臓を傷めることがあるので、どちらかを選んでください！”

私のはっきりと目が覚めたとの感覚を取り戻したのは次の日の昼頃のことで、真夜中の最初の出血から約36時間後のことであった。明らかに生死をさ迷ったことは確かだが、その間苦痛は全く感じなかつた。あのまま死んでいればこんな楽な死には方はないというのが最初の感想だった。これを契機に私から死に対する恐怖感が消滅し、その後の生き方に一種の覚悟というか安心感が生まれたような気がする。

家族はもとより周りの人々からは、京子ちゃんが近くにいた事、慶応病院が近くだったこと、ギリギリのところで適切な処理がなされたことなどで大変運が良かったといはれたものだ。この生死をさ迷った間の心の動きはどうだっただろうか。多分ほとんどの時間は無意識で何も考える事のない“無”の時間帯と思われるが、意識が徐々に回復する過程のある瞬間に昔の記憶が走馬灯のように出てきたことは確かだ。

ただそこに出てくる記憶は大昔の事ばかりで、そこには仕事のことも趣味の事も一切なく、出てきたのは昔付き合っていた或る女性と父や母の事ばかりだったような気がする。この記憶は過去50～60年間特に思い出したこともないもので、もしかするとこれが人間の記憶の芯の部分かも知れない。兵隊さんが戦場で死に直面すると“恋人の名前”や“おかあさん”とつい叫ぶのもこれと近い現象かと思う。

彼女の名前は“楨子”。私の姉喜美子の義父関義長の親戚で、妹慧子のクラスメートでもあり、母もそれとなく二人の関係を理解していた節があった。私自身も渡米直前までは彼女との結婚をそれとなく前提としていた節がある。

それが渡米一年後に天野楨子と結婚することになった。このために両親はじめ周りの人々に大変な困惑や戸惑いと迷惑をかけたに違いないことが記憶の芯の部分がお表にでたことで初めて理解できた。

なぜ楨子を選んだかについては明快に説明することは出来ない。ただ“大海に小舟の波乱に満ちた人生”を予感して、これを乗り切っていくためにパートナーとして楨子の方がふさわしいと直感して決心したとしか言いようがない。このとき、彼女は私の両親に会ったこともなく、私に方も楨子の両親を知らなかった。

“身の回りのものをまとめて飛んでくればそれでいい”という私に対して、“日本ではそんなに簡単にはいかないのよ”と言ってきた楨子が独りで、どんなに心細く寂しい思いをし、どんなに苦勞して花婿不在の披露宴まで漕ぎつけたのかということも大昔の記憶が目覚めたことで初めて理解できた。また遅きに過ぎるものの、これらの一連の記憶から自分の周りえの気配りが欠けていたことも分かって申し訳ない気持ちだ。

3週間の慶応病院の滞在を終えて7月26日無事退院することができた。気になっていた楨子の事を妹に聞くと今は生家のホテルの会長をしていると言う。50年以上も音信もなく思い出したこともない彼女に会ってみることにして、8月中旬ホテルの予約を取った。会ってみると50幾年の歳を経たことも一瞬消え去ってそこには昔の“楨ちゃん”がいた。

その晩は広いダイニングルームの奥まった一隅で全ての客がいなくなったあとも思い出の話で時を過ごした。生死の狭間をさ迷ったあげく楨ちゃんとの記憶が出てきたことも話した。自分が勝手に連絡しなかったことも詫びて心の整理も出来た。送迎バスに乗り込み挨拶すると見えなくなるまで手を振っていた。

これが彼女と50幾年ぶりに会う最初にして最後だろう。長い人生にはいろいろなことがあるものだ。



家内楨子はエルエフ会で講師をしたこともあるので、覚えている方もおられるかもしれない。

しかし折角の余白を埋めるのに家内と二人だけでは勿体ないと思い、ベル時代を終えて帰国を決意した1975年ごろの研究仲間のスイスETH出身のキャンパーニャ博士夫妻との写真にした。彼はアルペンスキーのオリンピック候補だったそうだし、当時私はレスター・ガーマー教授に誘われてビクビクしながらもロッククライミングをやっていた。

エルエフ会へ感謝と若干の回想

岡野 久雄

エルエフ会が終会になった。

当初は僅か数人で発会したが中心は小林氏、川崎氏、野々内氏、阿部先生等が集まられたようある。

私は、大分経ってから仲間に入れて頂いた。

大きく、エルエフ会の足取りを区分するなら概ね三期位に分けられる（時期的なデータが無いので時間的にはややアバウトな記事でごめんなさい）。

皆、社会に出てそれぞれの職業の、言わば中堅の責任ある部署の長としての人々の集まりの様であった。だから、親しみのある同学年であると同時に、それぞれの現場のキャリアを踏まえた生きた情報や意見を持ち寄っての会の流れであったように思える。同学年で同じ学び舎で勉強したものどうしであるのに社会人となり実践の場で日夜仕事をして来るとそれぞれの面々はこんなにも自信に満ちた意見を身に着けて来られているのかと感心させられる場面が幾度となくあった。

と同時に、私にとっては製造者で流通業に従事する者にとっては大いに参考になる幅広く、深い情報や思考のチャンスの泉でもあった。

上記は、エルエフ会の一期（初期）と私は思っている。

次に、同窓ばかりでは・・・との意見が出て経済学部以外の人も会員に迎えようではないかと・・・他の学部の方や、全く畑の違う方々をチャンスを得ては入会して頂き益々幅の広い知識やキャリアの方々の意見や情報を齎して頂ける会として、一期以上に活発な会になって行った訳である。

それぞれの知己、縁故などから新会員の方々が増え、それはそれは幅の広い層の面々の集まりとなってある意味では若返り、また、華やかな会にもなり単なる情報やニュースにとどまらず親睦会的な雰囲気をも一杯の会となった。

川崎さんや宅間さんのお世話で柏崎の原発、尾瀬の旅行、野々内さんのお世話で日立製作所の重電や家電の工場現場見学会、故宗像さんのお世話で志賀高原旅行、京大ヒュッテや東電志賀高原ホテルなどまだまだ多くの懇親旅行（奥様同伴）が活発に行われたものである。

故筆谷さんの作詞、作曲による「四年（四とせ）の春」という名曲もエルエフ会でもこの時期にゆきわたった。（この曲は、「琵琶湖周遊の歌」並みの名曲である。御夫人達も和した）。

外部活動としては、甲にしきさんによる東京宝塚レビュー観劇会があつて

各夫人共々大変華やいだ。また、疋田郁子さんのオペラ談義（連隊の娘・・・）、寺西昭夫さんの音楽鑑賞（母が教え賜いし歌・・・）もあり、故佐野清次さんの絵画鑑賞講座なども新風を吹き込んだ。小林太郎さんの仁徳天皇古墳の研究の発表なども特筆ものである。

もちろん、会そのものも当時の政情、金融事情、国際事情、石油事情、などなども識者をお招きしての卓話も盛んに行われた。幅の広いお話は、私にとっては実にありかたいこと。

阿部統先生の社会工学のお話、小林功さんの沖縄や海外の街造り、筆谷尚宏さんの I S S の紹介など先を見越しての実業の立ち上げなどは正に感動的であった。

故雑賀正平さんの銀行論も、その中での「銀行も潰れる」との意見は、みんなハットさせられたものである。

故中村茂さんの英語の本の出版を記念してのお話は蘊蓄の有る内容であった。

振りかえって見ると初期とは別の意味で意義のある会活動が、内に、外に溢れ、理論だけでなく 実業の場を通じても勉強させて貰った期で、申すまでもなくみんなの協力と会を盛り上げようとの善意で充実した期であった。

思うにこのころは会員各位も、それぞれの職業での可なりの重鎮の地位に就かれており、社会人としても、職業人としても、人としての充実の時期であったこと。

そのエネルギーを以て当エルエフ会の運営に大変なご尽力を賜ったことが大きく影響したこともあり、感謝に堪えないところである。

このあたりが二期と言える。

更に、時代が変わって最近のエルエフ会のメンバーが入れ替わっていった。ひとつは、初期や二期の人が次第に高齢化したこと。暇もできたことにより、会の開始時間を早めたり、高齢者の出席の頻度が落ちてきたり、意見がぼちぼちとなり、また第3の人生を歩んで多忙な人もありと、また、会員自身による卓話の提供が少なくなっていた。片や、外部卓話者を皆さんかなり熱心にお連れ頂いたのに、会員からの反応が盛り上がらない。

卓話者をお連れ戴いた会員に申し訳ないほどの会員の出席数である。

ある意味でそれぞれの理由で特に年配者の出席が落ち込んできたこともあり、幹事の方々のご努力にも拘らず過ぎし頃のような会ではなくなった。

然しながら、若手の方のご努力による卓話の内容は、貴重なお話ばかりと感じ入って居る次第である。老体よりやはり活力のある若い方々の人脈、知脈など初

期や二期と違う内容の卓話であったと心から感謝申し上げる。お蔭で、以前にも増した情報やニュース、また考えさせられるヒントをいただいている。卓話の内容もより専門的で正に、プロのお話が盛りだくさんにご提供され有難いことだと感謝の気持ち一杯である。

昨年（H29年）の12月14日の忘年会を以て、エルエフ会は幕となった。昨年の終回時に話しあったように、また野々内さんのご提案を出席メンバーが同意したように、新エルエフの集いが四方山話の集いとして、また、あまり格式ばらないでの、ニュースや情報の交換の場として、寄り寄り拝顔出来れば人生また一つ楽しみがあるというものでしょう。

今回エルエフ会終焉に当たり、今までに戴いた数々の御恩に深く感謝申し上げますとともに、若い頃から情熱を燃やして集った頃を思い出しつつ、会員の各位の更なるご健勝をお祈り申し上げます。

末筆になりましたが、エルエフ会運営に当たられて来た代々の幹事さんへのご努力に対し、厚く御礼を申し上げます。



筆谷尚弘君のこと

岡部陽二

私がエルエフ会に入れていただいたのは平成 14 年で、50 年の伝統を誇るこの会では新参加者である。もっとも、入会前に 2 回ほど講師として招かれ、証券市場などの話をしたことはあった。

エルエフ会に凄まじい熱意でもって誘ってくれたのは、京大同期の筆谷尚弘君であった。

彼との出会いは昭和 28 年に京大ヨット部に一緒に入部した時に遡る。この年には同期 4 人が入部、彼と私の二人が法学部生であった。大学のキャンパスで出会うことはほとんどなかったが、シーズン中は毎月琵琶湖畔柳ヶ崎での 1 週間の合宿で仲間ともども議論を戦わせていた。

昭和 29 年の 8 月に 5 日間の琵琶湖周航で青春を謳歌した時も、彼と一緒にであった。この周航の後に、彼自らが作詞・作曲し、ウクレレを弾いて歌ってくれた「別れの歌」を掲出する。この歌は今でも京大ヨット部で歌い継がれている。

別れの歌 (ヨット部愛唱歌)

S32 年卒筆谷尚弘君 作詞作曲

- 1、四年の冬の めぐり来て
潮に風に たわむれし
- 2、勝ちて 杯酌み交わし
流れる水に 船浮かべ
- 3、海の彼方は 海なれば
されど思いは 海越えて

ああ我 友と別れゆく
すごせし良き日 遠き夢
敗れて 泣きし友なれば
去り行く心 詫びしけれ
また会うことも いつの日か
水に結ばん 汝と我
水に結ばん 汝と我

残念ながら、私は肋膜炎を患って 2 年間でヨット部を退部したが、筆谷君は

一段とヨットにのめり込んで、競技を続けるために 1 年留年したほどである。昭和 33 年に卒業して三菱商事に入社、ブエノスアイレスに駐在したこともある。

ところが、入社 7 年後にサラリーマンに見切りをつけて退職、昭和 40 年に設立された「ISS」という通訳・翻訳のサービス会社の起業に参画してすぐに社長となり、20 年後には業界大手に成長させた。その間、日本青年商業会議所や日本翻訳連盟などの業界団体での活動にも精励した。

小林功さん、野々内隆さんと意気投合して、エルエフ会を異業種交流の勉強会として発足させたのも、彼の幅広い人脈と類稀な世話好きの為せる業であった。発足当初の会合は ISS の事務所で開かれていたと聞いている。

私は昭和 32 年に住友銀行に入行、16 年余の海外勤務を終えて平成 4 年末に帰国、京大ヨット部の OB 会で 35 年ぶりに彼と再会した。たちまち碁の好敵手にもなり、当時帝国ホテルにあった囲碁クラブ「石壽会」で毎週対局、その後には銀座や赤坂をはしごして賢い呑み方を教えてくれもした。さらに、私と別れてから彼一人でもう一、二軒訪ねるのが常であった。

当時帝国ホテルに朝 8 時から集まっていた「八〇会」という勉強会に誘ってくれたのも筆谷君であったが、この会が無くなるや、エルエフ会への入会を薦められ、いつの間にか会員になっていた。

エルエフ会の幹事は平成 2 年に東京電力副社長に就任された川崎弘さんをお願いし、会員への連絡などの事務はすべて東電の秘書に担当していただいていた。平成 19 年に川崎さんが東電を退職された際に、会の事務面は東電秘書に代わって根来さん、西岡さんとともに私が担当して継続することになった。結果的には、私一人が生き残って現在に至っている。

筆谷君も平成 24 年 8 月 16 日に、79 歳で一足先に逝ってしまった。8 月 16 日は奇しくも私の誕生日であり、これも彼との強い縁の証しかと懐かしんでいる。

エルエフ会との繋がり

小笠原 幹治

私が当会に入会させて戴くきっかけとなったのは、ある財団と一緒に役員をしている吉田勝昭さんの紹介でした。

京都大学卒業の方々を中心となって発足した勉強会があり、毎月最終金曜日に講演会を開催しているので、覗いてみませんかとお声掛け戴き、その後入会を許可されました。

私は昭和46年京大法卒ですので、皆様方よりも大分後輩になるのですが、暖かく迎えて戴きました。

以来、特別の用事が無い限りは出席しておりますが、講演者が著名な方々ばかりで、参加されている諸先輩の皆様も博識ですので、拝聴する度に新しい知識を吸収出来、大変勉強になっております。

一番印象に残っているのは、入会して間もなく何か話をしてくれという事になり、恐れ多いとは思ったのですが、「グループ名門企業の破綻に至る経緯」という表題でお話させて戴いたことです。

私は大学卒業後、ある都市銀行に入行したのですが、30代後半に経営企画担当でその企業に業務出向したことがありました。

昭和40年頃「財閥グループの総合デベロッパー」を標榜して鳴物入りでスタートし、設立当初は共同で不動産開発事業を手掛けたのですが、その後グループ各社が独自で不動産部門を立ち上げた為、私が出向した頃は細々と宅地開発事業をやっている程度でした。

その状況に、銀行出身の社長が焦燥感を抱き、丁度不動産ブームが始まった頃でしたので、不動産金融事業をスタートさせました。当初は融資審査も厳密に行い、かなりの利益を出したのですが、その後次第に審査基準も甘くなり、バブル崩壊とともに多額の不良債権を抱え倒産に追い込まれました。

その時に得た教訓は、目先の利益に囚われず長期戦略を立てて経営することがいかに大事かということでした。苦い経験ではありましたが、その後の銀行員生活には大変参考になりました。

私個人としても、5年後、10年後のあるべき姿を思い描きながら人生を送っております。

日野原重明先生が提唱されていた“アンチエイジングからプロダクトエイジングへ”つまり、年齢に関係なく何ごとにも好奇心を持って、創造力を逞しくして行動するということだと思いますが、この精神を忘れずこれからも精進していきたいと思っております。

常々、戸籍年齢は変えられないが、肉体年齢と精神年齢は鍛えることによって若返ると信じて行動しております。

最後になりますが、当会に入会させて戴いたお蔭で素晴らしい諸先輩方とお近付きになることが出来、また知識の幅も広がりました。改めて感謝申し上げます。



女満別に移住してからもう22年あまりになりました。どうして田舎に住むことになったのかと訊かれることがよくあります。理由などはたいていあとがらつけるものです。私の場合も、木当のところは、いろいろな偶然の重なった結果ということです。ただ、今になって言えることは、運が良くて、良い環境とりわけムラの人たちとの巧まざる自然な関係構築ができたことだと思っています。倉敷で生まれ、幼稚園は倉吉市、小学校入学時は布施市（現、東大阪市）そのあと中国天津市、引揚げ後布施市、社会人になってからは八幡市（現北九州市）そのあと東京、西宮、八王子、川崎を経て現在です。先祖代々の古い墓地は三木市ですがそこには両親も住んだことがないのです。いわば流転の生活の中で培われてきた適応力が、女満別での快適な生活をもたらす大きな要因だったということでしょうか。

女満別に移住すると知った雑賀君などは、どうせすぐに東京に舞い戻ると公言していました。また、多くの知人たちの中には、田舎に戻りたいが、家内が不賛成で出来ないとか、現在の知人友人との縁を切れないとか、新天地にうまく馴染めるか不安というような声が多かったと思います。京城から引き揚げて福島県の田舎で暮らしたのち埼玉に住んだ家内も、私と同様こだわりやしがらみがなかったはずですが、女満別移住にはさすがに驚いた風でした。最初1か月、2年目2か月と夏を過ごしてみても、女満別の良さをよく理解したのです。どういう風に説得したのかと尋ねる方もありましたが、説得したのではないのです。

田舎にはデパートもなく美術館もありません。演劇、寄席、音楽会などありませんが、豊かな自然環境、温かい人情、非貨幣的交換経済、平安はたっぷりあります。女満別ではそれに加えて、知床、阿寒、摩周、釧路湿原、網走湖、サロマ湖、濤沸湖、原生花園、地球が丸いことを実感できる能取岬、そして山海の美味、数多くの温泉に恵まれています。おかげで、私たちは多くの客人の来訪、来泊に恵まれました。シンガポールの旧友たちは2度、のべ14人、アメリカのジャズミュージシャン2人連れ、中国人女性2人なども泊まっていきました。8冊のゲストブックにこれらの人たちの記述も残っています。

今は若い人たちが田舎住まいを模索し、実現しているようです。テレ・ワーク可能な時代になって、かつての様に田舎では仕事がないという状況が大きく変わっているのでしょう。別荘を持って余している年配の人たちもあります。私は、田舎と都会での二住生活が理想的だと思っています。斜里町に家を建てた知人夫妻が、川崎との二住生活を実現しています。新しく家を持たなくても友人知人

の別荘や住宅を使わせてもらうことができるでしょう。少なくとも一月単位でそれを実行できればよいと思います。旅行会社ではなく手作りの旅行計画や長期滞在計画が素晴らしい田舎暮らしへの扉を開くでしょう。

会員の皆さん、そのご友人方のオホーツクご来遊を楽しみにしています。これまでに来られた会員は、四反田君、寺西君ご夫妻、西岡君ご夫妻、川崎君ご夫妻、内海君ご夫妻、丹羽君、宗像君、小林太郎君ご夫妻、後藤さんご夫妻、佐野君、塚本君、でした。

今、女満別は初冬、すでに雪が4度も降り積もりました。庭の消え残った雪が明るい日差しを跳ね返しています。シジュウカラ、コガラ、アカゲラ、ヒヨドリたちが餌台のヒマワリの種や金網に入れた脂身をつつきに、エゾリスはリングの皮や芯を片づけに来ます。

陽ざしの強い日は日中暖房を止めても 22℃をキープしています。菜園作業に代わって、室内でコマツナ、バジル、セリを育てています。

「分かち合い」社会の構想一連帯と共助のために 神野直彦ほか編 岩波書店 2017 年には参加型民主主義構築の提案がありますが、これと田舎暮らしとは共通する要素があると思いました。誘われた私的な研究会で、「大規模公共事業における合意形成」の最終報告執筆に取り掛かっています。納税者や地域住民の積極的な参加についての議論をケーススタディも含めて行っています。ダム技術者2人と私との小さな研究会です。川辺川ダム、吉野川第十堰、八ッ場ダムなどを少し勉強しました。後継者難のため来年3月で打ち止めです。

李白が「山中問答」を書いています。それをもじって、私も「林間楽」を作りました。横書きにはなじまないの、このところだけ縦書きにします。

客訝何意棲林間
笑而応心身自慣
桜花隨風婉然去
非人間愉樂輪翰

林間楽

問余何意棲碧山
笑而不答心自閑
桃花流水窅然去
別有天地非人間

山中問答

いつの日にか再会を期待して、御機嫌よう。

エルエフ会関西は木曜会

小林 太郎

長く続いてきたエルエフ会も 2017 年で事実上終わりを告げ、今後は何人かが集まっ適宜話し合うことになめという。一抹の淋しさはあるが、これもメンバーの老齢化に伴ってしかたのないことかもしれない。この時に際して小林功君の提案で文集を作ったらということになったとのことで、私も古いエルエフ会のメンバーとして寄稿することとした。

エルエフ会は昭和 49 年に小林功君や当時通産省にいた野々内隆君、川崎弘君たちが事実上の発起人になって始めた会合であった。京都大学の卒業生を中心として始まったが、その後は京大に限らず、東大出身者や技術系の人々をも含めて毎月最後の金曜日に西麻布の霞会館で集まることになり、各会員の話や時にはゲストのスピーカーによる講話などを聴き、年末には忘年会をするのが恒例であった。一昨年には元大阪市中央児童相談所長の高月夢子さんを大阪市の里子制度についての話を聞いたりもした。この伝統を持つエルエフ会が今年一杯で事実上解散になるというのは一抹の淋しさを禁じ得ない。

ところで関西では木曜会というのがあり、毎月第一木曜日に集まっている。この会の歴史は長く、1956 年、我々が会社にはいった頃、淀屋橋界隈に勤務する人たちが集まってそれぞれ自分の仕事の話などをしていただのが始まりであった。時には京都大学の鎌倉教授(故人)や宮内教授(同)を招いてお話を聞いたりもした。ところがこの頃から企業や官庁の東京への集中の傾向かが高まり、メンバーのほとんどが東京周辺へと移ってしまい、大阪に残ったのは私と東洋紡の石田幸三君、関西生産性本部の宇埜君裕三君くらいになってしまった。大阪に残った 3、4 人でどうしようかと考え、我々は法学部出身で経済については知らないから、経済学を勉強する機会を作ってはどうかということになった。近代経済学は数字や数式が多くてとても難しいものだと思い込んでいたが、ある人からサミュエルソンの『エコノミックス』は解りやすいと聞き、それを読むことにした。当時はこの本は邦訳がなかったので、原書を読むことにしたが、そのボリュームたるや、590 ページもあって、読み終えるまでに 2 年半もかかった。そうこうするうちにまさかと思っていた私までが東京へ転勤になり、木曜会もまるで開店休業状態になってしまった。

10 年近くして私がお大阪に戻った時には宇埜君裕三君や石田幸三君が細々と続

けていたようであるが、たまたまこの頃、かねてからのメンバーであった潮崎起君や本条勉君が大阪へ転勤になり、木曜会の復活の兆しが見えてきた。たまたまこの時期に松下電器の秋田忠志君や日本電池の社長、のち会長の根岸茂君たちも加入し、木曜会は20人近くの人数になった。そこでみんなで相談して次のことを決めた。

- 1、木曜会に入りたい人は男女の別なく、学歴、職歴等で差別することなく受け入れる。
- 2、自分の仕事や業界に役にたたないことをする。つまりいわゆる異業種交流会のように自分の業界以外から役に立つ情報を得ようなどとはしない。

この度は二つをモットーにして若い人と女性を重点的に参加を募った。その結果、女性では元大阪市中央児童相談所長の高月夢子さん、その後輩の和田野康子さん、大手前大学で大学図書館学を講ずる前川治子さんなど女性も増え、各自の発表や講師の紹介などに積極的に活動している。

木曜会では以前から年一回配偶者同伴で一泊の旅行をしており、これは配偶者ともども親睦を深めるよい機会になっている。今年11月8日に元大阪ガス監査役の安場耕一郎君のお世話で六甲山のヴォーリス六甲山荘を訪れた。

木曜会は東京のエルエフ会と兄弟姉妹関係にあり、もとエルエフ会員である渡辺信作君は関西では木曜会員になっているし、元木曜会員の谷本健治君は関東へ行ってエルエフ会員になっている。

木曜会にも高齢化の波は押し寄せている。しかし若い人たちを積極的に勧誘することでこの会を長続きさせていきたいと考えている。

エルエフ会の維持された方々への感謝

柴田 徹一

2017年12月15日（金）5時半から、エルエフ会の最後の「忘年会」が始まりました。思い返しますと、1968年9月の慶応大学医学部の「8年間の医学部紛争」の頃から、49年近く経過しました。会を維持されたエルエフ会員のご努力と卓話をされた諸先輩、そして、お世話頂いた方々に感謝いたしております。

「エルエフ会への入会」は、今は女満別在住の「小林功ご夫妻」のご厚意によるのものでした。40年以上前ですが、私共夫婦へ親しくして頂いた、その一つの結果でした。切掛けは、私の家内が「お習字を習いに行った家」で、小林様の奥様にお会い出来た事でした。道路を隔てて、八王子市の小林宅と多摩市百草団地が道路一本隔てた「お向かいさん」でした。

当時、8年間の「教授会と助手会の紛争中」で、仲裁役を強いられた「医学部助教授・講師会」で、私が会計係を担当していた時でした。信濃町での情報漏れを避けた「対応策会議」を、小林氏の「渋谷の事務所」を拝借した事もありました。

1973年の石油ショックの時は、「エルエフ会」には、「通産省」と「石油業界」そして「新聞社記者」の会員が、毎回ご出席され、「解決策」を模索されていた「状況」には、感銘を受けました。「国民の生活確保を第一」にを常に念頭に置いていた「頼もしい集団」でした。

私も当時、病理助教授の仲介で、「外科手術や内科薬物治療」での「術後の急性や慢性炎症の薬物治癒」と「その応用による癌治療」で、何とか「死の回避」を模索していました。従って、「社会における難問解決」の「傾向と対策」として、大変参考になりました。

小林さんからは、「エルエフ会員の医療相談」と「慶応病院など適切な医療環境情報を頼む」とのご依頼がありましたが、はたして「お役に立っていたか?」、「甚だ力不足の若造」でした。

社会環境も医療環境も、時代と共に「激変の時代」でした。エルエフ会のご講演のお陰様で、「新聞やテレビの特集」の「受け取り方」等、「社会の重要問題の位置付け」を多面的に考えさせられました、行動するに際しては、「エルエフ会の刺激」を糧としておりました。

今は「エルエフ会消滅後」の「不安」を感じています。

エルエフ会と六本木の思い出

宅間正夫

約 25 年前、エルエフ会に入会させていただき、職業柄、電力・原子力技術一筋の世界だった私は、文系の皆様のこの会で幅広い知識や考えを学ぶなど貴重な体験をした。このような機会をいただけたことまことに皆様から感謝するとともに会員であることを誇らしく思っている。

1. 東電有志の同人誌「智の広場」への 2003 年夏号の寄稿文から

「智の広場」は、最盛期 20 人くらいになった文系・理系混合の部門を超えた討議と啓発の有志の会である。毎回有志が互いに自由題で小文を持ち寄って討議する。エルエフ会について、当時私が寄せた「エルエフ会」なる小文は、会の様子的一端を伝えていると思うので、そのまま以下に紹介する。なおこの会は参加者の高齢化による減少から、2016 年 5 月を以って終会とした。

(題) エルエフ会「智の広場 2003 年夏季号」より

「ひよんなことから京大経済学部 31 回生の同級会エルエフ会の会員になっている。毎月最終金曜日 6 時に集まる会。会員数 30 名弱、幹事が会長役プラス世話役で、経産省から東電に来られた川崎さんがそのひとり。

小生が柏崎刈羽発電所在任中にこの会のメンバーがご夫人同伴で約 20 名おいでになり、その夜の柏崎市内の徳間旅館(注:現在はすでに廃業)での懇親会に、日本海側特有の冬の雷の話をちょっとご披露した。それが東京での最終金曜日の例会で”雷さんの民俗学“を講じる羽目になって、ついでに会員に推薦された次第。外部の人を入れて同窓会を活性化しようという作戦で、ほかにも外人部隊が数人いるが全く平等公平で、違和感がない。毎回経産省の研修所霞会館での例会は自由討議、ときには内外の講師の講話、を楽しみに十数人が顔をそろえる。オリジナル会員たちはちょうど 70 才。退役された方が多いがコスモ石油社長の岡部さんなど現役で頑張っておられる方も多し。また外部講師としては、例えば最近では経産省を飛び出して J リーグの事務局長になった若手官僚、元公正取引委員会の委員長、狂牛病と食の安全で国立公衆衛生院の部長、などなど。

わたしども外人部隊には、例えば、元宝塚スター・現東京宝塚劇場支配人の小川さん(甲にしきさん)、オウム事件当時の警視総監井上さん(今年山梨県知事選でおしくも敗退)など、ユニークな方が多し。東海大の柴田さんは薬学専攻で同大学病院の先端医療のセンターを率いる。技術系は小生と 2 人くらい。JCO 事故や東電データ改ざん問題などで、情報公開・インフォームドコンセント・技術

者倫理など狭き専門社会の弊害について皆さんのご質問に答えていると、同じような病院の不祥事の内幕も話題となって、改めて医者の世界と原子力界が実によく似ていることに驚かされる。小川さんのご尽力で2度ばかり夫人同伴で宝塚歌劇を観た。生まれて初めてだが、とにかく華やかで楽しいものだ。小生の東電の友人の娘さんも男役のスターになっているが、残念ながらまだ見る機会がない。彼がブロマイドをもってきてくれたとき、トンビが鷹を生んだ、などとからかっても相好を崩している。関西出身が多い京大だから当然トラキチが多い。会員の一人に頼まれて、小川さんのツテで東京猛虎会関係者を紹介してもらい、小生がその方に連絡を取ると、向こうから、あそこは若いものが多いのでいささか品がない、お年寄りには(猛虎会会員になることは)お勧めできない、とのこと、それもそうか、と納得。井上さんのオウム事件の話は、特に教祖逮捕にサティアンに踏み込んだあたりは迫力があつた。ご本人にも強烈な体験だったのであろう、メモひとつなしに詳細にわたる話。女満別に移住されたヴァイタリテイあふれる遠隔地会員小林さんから毎回寄せられる”皆をうらやましがらせる北海道だより“も素晴らしい。地域社会に本当にドップリ浸かって地域文化のリーダーになっておられる。

小生が会に誘い込んだ電気工学科同級の和田正倫君が2年前に急逝した時は皆さんがその早すぎる鬼籍入りを惜しんでくれた。東久留米市民合唱団の男声グループ”ダンディーズ“の年一回の公演を皆が楽しみにしていた。もう一人の幹事役の寺西さんも武蔵野市民オーケストラでヴァイオリンを弾いている。多才な方々が多い。もっとご紹介したい方々がたくさんおられるが残念ながら紙面の都合でこの辺で。」

2. エルエフ会の思い出のうち、私の記憶に残るいくつかを記してみる。

会員には灘高校の先輩、筆谷さんと宗像さんがおられた。東京生まれの私がないぜ灘高校か、これは父の転任で信州の松本から阪神間の宝塚に移ったのがちょうど高校受験の時だったことによる。我が国に鉄砲が伝来後、強力な鉄砲衆となって信長、秀吉と戦った和歌山の根来衆、雑賀衆のご子孫の根来さん、雑賀さんのお二人が同時に同級でおられたのも珍しかった。毎回お招きした外部講師の中で、大学電気工学科同級で経営のプロになった河原春郎君、高校同期の新聞人武部俊一君もよい話をしてくれた。また最近話題となっているベーシックインカムについて10年以上も前に会員の佐野さんがご紹介くださったこと、今更ながらエルエフ会の議論の先見性を感じている。近年では、野々内さんのご紹介で元スロバキアの高松明大使の興味深いスロバキアのお話があり、その2か月くらい後に同じ話を、今度は私が入っている原子力学会シニア連絡会(SNW)で、日立の荒井利治さんのお招きで高松大使からうかがった。後の飲み会でわかっ

たのは、野々内さん、荒井さん、高松大使は皆、京都2中の先輩後輩の仲。SNW会員の元国鉄技師長の岡田宏さんも同じ、とのこと、エルエフ会は交友関係を広げてくれた。岡部陽二さんの博識は驚嘆すべきもので、拙著「雷さんと私」では貴重なアドバイスをいただいた。

3. エルエフ会の例会場の霞会館は六本木にある。私は両親がロンドン勤務の間、大学の2年半(1958~60)、六本木は鳥居坂のがけ下の日銀の学生寮で過ごした。今も在る六本木交差点の「アマンド」から南に芋洗坂を下ったところ。

このために例会に通う際、時には日比谷線六本木駅を下車してから六本木界限を懐かしく歩き回った。しかし約60年前の六本木とはすっかり様変わりしている。昔は高いビルもなく、静かな屋敷町で、六本木は渋谷から汐留までの都電と浜松町から四谷3丁目までの都電とが十字に交差する停留所、その柱に「うぐいすを たずねたずねて あざぶまで」(芭蕉とされる)の句が書いてあった。鶯の鳴き声をわざわざ聞きに来るほどのひなびた、しかし風流な町だと思っていた。しかしのちにこれは江戸時代から有名な「和菓子屋“青野”の鶯餅のこと」と知ってびっくり。なお六本木は、駒場へは渋谷に出て井の頭線に、本郷には信濃町に出て中央線に乗り換えられる、通学には便利な町だった。

六本木の交差点の南東の角に、その当時から今でもやっている「みのちあん」(水内庵)というそば屋がある。学生寮から学生が「みのちあん」に電話で出前を頼んだ時、寮監(御老体の頑固なドイツ駐在経験の陸軍軍人)が「若い学生が女に電話するとは風紀上げしからん」と叱ったことがある。「みのちあん」を「美濃ちゃん」と間違っただけらしい。大笑いのひと幕だった。なおこの学生は明治の外交官小村寿太郎の孫。

この交差点には兄弟でやっている「誠志堂」という古本屋があって、交差点の北東角には「俳優座」があった。そのために演劇関係の本が結構多く、私は演劇にあまり興味がなかったが、その当時この古本屋で坪内逍遙訳のシェークスピア全集(中央公論社)をわずか1000円で手に入れて、今でも大事に持っている。誠志堂には例会の度に何度か立ち寄っていたが、10年位前から店じまいしてしまった。なお、「東京タワー」が日に日に高くなっていくのがまじかに見えた場所だった。

六本木にこんな時代があったことを今では想像もできない。

エルエフ会の皆様、長い間本当にお世話になり、ありがとうございました。

エルエフ会の思い出

谷本 健治

9年前大阪から東京に転宅した時、小林太郎さんから「東にも勉強会があるよ」と誘われ、その忘年会に初めて参加した。翌年1月は寅さんファンクラブ松井会長の演題「笑いは百薬の長」、ユーモア溢れる語りに笑いの渦が広がった。

4月は柴又へ、「矢切の渡し」を舟でこえ、帝釈天や商店街を散策しながら寅さん一家の人たちをさがす。その日の参加者は18人、皆さん元気で明るく、自然に仲間入りさせてもらった。懐かしい一コマである。

会のメンバーは実に多彩で、テーマは内外の政治経済から科学技術・医療・社会・文化に広がり、専門家の話を聴き、議論を楽しんだ。帰途、六本木通の小さな喫茶店に立ち寄って一息入れるのが常だった。

だが、去年は西岡さん、今年に入り宗像さん、塚本さん、佐野さんが永眠され、会は急に淋しくなった。師走の寒風が殊の外身に沁みる。

西岡さんは西の木曜会の旅行で、田辺の熊楠記念館から龍神温泉、高野山へご一緒した。私も戦時中から数年粉河の近くに疎開していたので、和歌山や「紀の川」の思い出など話しあい、西岡さんの郷里に寄せる心情にうたれた。夫人は有吉佐和子の従姉妹である。

佐野さんとは仕事の縁が深い。大手町のビルが隣合わせで、夕刻から互いの会社の独身社員男女十数人でボーリング会を催した。が、主催者の思惑とは違って一組のカップルも成立せず。後日「笛吹けど踊らず」と二人で大笑い、そのときの佐野さんの屈託のない笑顔が忘れられない。三十数年前のことである。逝去された諸兄のご冥福を祈る。

今年11月は高島元駐独大使の「日本とドイツ」、戦後の復興から東西統一を実現しEUのリーダーとなったドイツ固有の堅固な制度（政治の安定・職業教育など）が明確に示され、会の掉尾を飾る名講演であった。

ただ、9月総選挙では反難民を訴える右翼政党AfDが第3党に進出、メルケル首相は第2党SPDとの連立を図るが未だに難航している。世界各地に広がるナショナリズムとポピュリズム、北朝鮮の核開発、エルサレム首都認定などなど、世界は大きく揺れている。

先日の忘年会の席上吉田さんの「18歳と81歳の違いは？」一問一答進むにつれ、頭が柔らかくなり、頬が緩んだ。・・・そうだ。「81歳は18歳、人生はこれからだ！」

最後に、皆さんのお陰でいつも有意義な時間を過ごすことができた。ありがとう。

エルエフ会の思い出と今後の生き方

寺西 昭夫

私は平成3年に、小林功君の紹介で入会した。当時は新入会員になろうとする人は、レクチャーをして、OKサインを会員からいただいて、やっと会員になれた。私は医療・医薬品業界について約1時間しゃべったと記憶している。

当時は幾多の講師の方々のお話を聞き、本当に勉強になった。まさにグローバルな視点で物事がみられるようになったと感謝している。

思い出としては、柏崎刈羽原発を見学したこと。私には、この原発は二重の安全設備が完備されていたという印象が残っている。

原発見学もさることながら、その夜刈羽村の旅館に一泊、宴会で大いに盛り上がった。盛り上がった立役者は筆谷尚弘君で、ウクレレを持参して皆がうたう歌の伴奏をした。それが音程やリズムがよく合っているものだから皆が次から次へと歌った。筆谷君は自作の歌まで披露した。私はウクレレのことはほとんど知らないが、彼はよく使いこなしていて、生き生きしていたのを思い出す。筆谷君はそういう一面も持った人であった。

盛り上がった所に、原発所長の宅間正夫氏が新潟の地酒の銘酒を持参して宴会に参加され、更に盛り上がったのは言うまでもない。

私は、80台の半ばになろうとしている。身体の衰えを感じるようになった。これからは、人様に迷惑をかけないように、健康で楽しく生きていかねばならない。その為には、

1. 健康のために、健康知識を増やし、実行すること
2. 家族のために働くこと。できるだけ体を動かすこと
3. できるだけ多く「感動」すること

と考えている。3.の「感動」については注釈がいる。私にとって感動とは、一つは良い音楽を聴くことである。深夜放送をブルーレイに録画して繰り返して聞いている。二つ目は囲碁鑑賞。プロ棋士が苦悶のあと考え出した妙手を感心しながら。三つ目はスポーツ鑑賞。例えば1915年のラグビーワールドカップの日本一南ア戦。これは何度見ても感動に値する。感動すれば、認知症予防になるだろう。

そういうことで今後頑張りたい。

住宅管理組合の経験

野々内 隆

私は今、清新北ハイツ住宅管理組合総務担当副理事長(任期2年)の職にある。初めての経験であり、やってみると面白いので、書いてみることにした。数字の誤りなど不備な点もあるかもしれないが、すべて私の責任であるのご理解いただきたい。

この管理組合は国土交通省所管の法律に基づき設立された公的な団体である。住民全体が参加する団地総会で承認された「清新北ハイツ住宅管理規約」が憲法のようなもので、全ての行為はこの規約に基づいている。

団地は12棟のマンションによって構成され、約840世帯が入居しており、二つのクリニックも設置されている。住民全体を100班に分け、各班から各1名の号棟委員が選ばれる。100名(任期2年)の号棟委員によって団地全体が運営される。各棟の号棟委員が各棟ごとに1名から3名の理事を選出し、全体で21名の理事があり、この理事が理事会を構成して、団地全体の意思を決定する。理事は理事長1名、副理事長4名、部長理事2名を互選し、理事以外に号棟委員の中から監事2名が選ばれる。

理事は総務・広報・環境緑化・営繕・設備の各班に分かれて、職務を分担する。皆さん素人かつボランティアであるが、実に熱心に職務を遂行しているのには頭が下がる。理事の皆さんは平日は自分の仕事を持っているので、会議は土・日・休日にならざるを得ない。おかげで私は土日のゴルフは諦め、平日に家内とゴルフを楽しむ事にしている。

管理組合の問題は建物の老朽化と居住者の高齢化である。建物の老朽化は修理費が高くつくことであり、結果的には住民の負担がだんだん高くなってくる。最終的には建物の建て替えと言う事になる。

居住者の高齢化は号棟委員のなり手が無くなっていくことと居住者の孤独死が現実化してくることである。号棟委員は任期2年の輪番制である。仕事が忙しいと言って逃げる人もいるがほとんどはやりくりして委員を引き受けてくれる。専門でもないのに営繕や植木の管理に一生懸命頑張ってくれる。このため業務管理会社に委託する部分がだんだん増えてくる。法律では理事の職務を弁護士など外部の専門家に委託することが出来ようである。我々の団地はまだそこまでは行っていない。弁護士は顧問として委嘱している。

住民の高齢化はもっと困る。役員のなり手がなくなることだけではない。都会では「隣は何をする人ぞ」である。個人情報保護の規制が一層困った事態になっている。居住者は入居時に、家族構成などを管理事務所に届け出ることになって

いるが、それが事実かどうかチェックすることはできないし、入居後の変動を中々チェックできない。ましてやその資料を必要に応じて理事が閲覧することは困難である。今、行政とタイアップして「見守り隊」と称して高齢者の家庭を本人の希望により定期的に巡回している。この制度をもっと現実的に再編できればいいと思っている。孤独死は現実化している。新聞がたまっているが、部屋の電気がついていることを隣の住人が確認し、ベランダから窓を壊して入り込み孤独死を確認した事もある。奥様が買い物で外出中に旦那が自宅で急死したこともあった。どう対応すれば良いのだろうか。警備保障会社との契約で何かできないだろうか。

以上いろいろ書いてみましたが、日本全体の問題でもありますね。切りがないのでこのへんで止めておきます。



寛容で温かな集い

三露 久男

私がエルエフ会のメンバーに加えていただいたのがいつだったか。物忘れのひどい人間なので、思い出せない。ともかく昭和の時代、数十年前のことである。しかし、どのようにして誘われたかは、はっきり覚えている。創立メンバーの野々内隆さん、小林功さんのお二人からこもごもにお声をかけていただいた。この会は京大経済学部昭和31年卒の同期生を中心にした横断的な集いで、お互いに他分野の経験に基づいた交流をしようという集いだが、マスコミ関係者がいないので、捜したところ、私の名が浮かんだのだという。

私が朝日新聞の経済記者として通産省（現経済産業省）を受け持った1970年代の前半、野々内さんは中東政策課の課長をしておられ、「取材先」として初めてお目にかかったが、その縁がエルエフ会へのお招きにつながったのだろう。年次からいえば私は創立者世代より6年下ということになる。学部も私は法学部だったので、うまく交わっていけるか、いささか自信がなかったが、様々な先輩のお話を伺えることに魅力を感じ、加えていただいた。

毎月最終金曜日という、仕事に一区切りのついた日の夕刻の集いは、じつにさまざまな話題が飛び交って、経済ニュースばかりを追いかけていた私に、新しい知見をゆたかに与えていただいた。メンバーの大半は、企業に勤める方々と官僚だったから、その中では私は独り者的ではあったろう。本質はどうであれ、現在のように新聞メディアの「信用」が表向きには落ちてはいなかった当時あって、生意気盛りの私は、しばしばエラソーな意見をぶった記憶がある。汗顔せざるを得ない。それを、にこやかに聴いてくださった諸先輩の寛容を思い出す。

エルエフ会では、時折、旅行を共にすることもあった。現在の会員である宅間正夫さんが所長をしておられた東京電力柏崎原子力発電所を見学させていただいた時の印象は今も鮮やかである。さまざまな分野の一流の専門家を招いての学びは、この会なくしては得られなかっただろう。これには、のちになって参加されたメンバーの方々の貢献がとくに大きかったと思う。

エルエフ会を振り返って胸に湧き出す感想は、寛容で温かい集いだったということだ。取材先を相手に情報を得ようと油断なくギスギスした仕事をしてきた身にとって、これはありがたく、忘れがたい思い出であり、経験であった。

この素晴らしい集いも、いま大きな区切りを迎えようとしている。私はクリスチャン（プロテスタント）で、もとより聖書に答えを求める者である。以下の旧約聖書の言葉をもって、この事態を受け止めたいと思っている。

何事にも時があり

天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

（「コヘレトの言葉」3章1節、新共同訳）



エルエフ会番外編

吉田勝昭

私は野々内隆さまの紹介で 2008 年の夏に入会させていただきました。そのとき卓話させていただいたのが、「日経『私の履歴書』から得たもの」だったと思います。しかしこの時、野々内様から、この会の奥様も楽しめる番外編を企画して欲しいと頼まれました。そこでこれまでに私が企画し、実行したもの 4 つをご紹介します。

1. 柴又帝釈天（2010年4月6日）参加者：18名



当日、京成柴又駅で 10:00 に集合、駅前の寅さん銅像の前で 9 組の夫婦の記念写真を撮る。ガイドさん 2 名に帝釈天の寺宝（美術彫刻）と日本庭園、寅さん記念館、矢切の渡しなどを案内してもらった後、昼食を有名な料亭・川甚でとる。

2. クルーズでさくら見物（2011年3月31日）参加者：19名



浜離宮ハーバーから出航。隅田川支流の両岸に咲く満開の桜を見ながら、持ち込みのお弁当、アルコールを楽しむ。退屈すると「全国・寅さんファンクラブ」会長で医療ジャーナリストの松井寿一氏に「ユーモア・アンチエイジング」の話、宅間さんから「原発の現状と課題」を聞いた。

3. 浅草・伝法院と木馬亭（2011年4月22日）参加者：8名



伝法院の期間限定の寺宝展を見る。地下の宝物館に徳川秀忠公、家光公が奉納の絵馬や谷文兆作の絵馬等のほか、明治画壇の巨匠・柴田是真が描いた「羅生門での茨木」など国宝級や重文級の絵画が所せましと並んでいた。小堀遠州造の回遊式庭園で記念写真をとる。この後、木馬亭でお笑い演芸を楽しんだ。

4. 有料老人マンション見学と料亭「うかい」(2012年6月12日)

参加者：8名



「老後の選択肢として見学しておこう」との発案があり、八王子にある有料老人マンションを訪問。ここは私が元担当役員だったので、2時間ほどかけて施設の概要説明(医療・介護ケア内容、料金、サービス体制)、施設・設備見学(周辺環境、間取り、風呂、運動機器、娯楽、文化、1週間の献立表、料理体制など)、そして質疑応答を行った。その後、近くの地元で有名な「うかい」で昼食をとる。

5. 2010年5月例会(2010年5月28日)の記念写真



6. 忘年会 21 人 (2009 年 12 月 11 日) 参加者 : 21 名



7. 忘年会 18 人 (2011 年 12 月 9 日) 参加者 : 18 名 (欠席 2 名)



エルエフ会の歩み

- 第1回 1975/09/11 (木) 渋谷区道玄坂 (小林のオフィス) サロン-X 発足
出席者 阿部統、廣岡良彦、小林實、雑賀正平、野々内隆、小林功
話 題 海外プロジェクト (中近東、東南ア、南米など)
沖縄海洋博アクアポリス処分
社会工学とは
教育 (塾、進学、大学入試など)
ふるさと村、中央 vs 地方、「油断」老化、スポーツクラブなど
- 第2回 1975/11/04 (火) 渋谷区道玄坂 (小林のオフィス) サロン-X
出席者 阿部、野々内、川崎弘、小林功
- 第3回 1975/12/19 (金) 目黒不動前「こしき」忘年会を兼ね会員拡充を討議
出席者 阿部、野々内、廣岡、川崎、西岡、筆谷、小川弘、小林功
- 第4回 1976/01/30 (金) 千代田区 I S S (筆谷のオフィス)
出席者 阿部、西岡、雑賀、野々内、廣岡、筆谷、後藤政弘、小林太郎、
小林功
(以後第13回 1976/11/26 まで I S S で開催、第14回から霞会館で
開催)
- 第5回 1976/06/25 (金)
出席者 阿部、野々内、光岡義郎、筆谷、川崎、小林太郎、小川弘、西
岡、廣岡、後藤、小林功
会の名称、幹事、会則決定
名 称 光岡提案によるほか11候補からエル・エフ会と決定
幹 事 野々内、筆谷、小林功
議 題 「わが国証券業界の現状」光岡会員 (大和証券)
- 第50回 1981/01/30 (金)
出席者 阿部、川崎、後藤、寺田洋三郎、柴田徹一、中村茂、檜山旦昭、
小林功
議 題 「アジア生産性機構の会議に出席して」檜山会員 (三菱電機)
- 第100回 記念例会 1986/06/27~28 住友金属 箱根山荘

出席者 阿部、野々内、筆谷、寺田、柴田、宗像、岡野、内海、小林功

第 150 回 1992/04/24

出席者 川崎、筆谷、寺田、渡邊信作、柴田、岡野、佐野、塚本、小林功
議 題 特になし、05/15～17 の木曜会との合同旅行（南紀方面）打ち合わせ

第 180 回 1995/12/08

出席者 川崎、寺田、渡邊、柴田、檜山、岡部敬一郎、小林太郎、宗像、
寺西、西岡、塚本、雑賀、四反田、小林功
議 題 新幹事団の構成について討議

第 181 回 1996/01/26

出席者 渡邊、檜山、岡野、有岡、三露、塚本、雑賀、四反田、佐野、
西岡、寺西
新幹事決定 川崎弘、西岡稔、寺西昭夫
議 題 長期欠席会員、遠隔地会員の取扱い、新規会員勧誘などのルール
決定

第 200 回 1997/11/28

出席者 筆谷、寺田、柴田、檜山、岡野、宗像、有岡恭助、塚本、雑賀、
四反田、佐野、西岡、川崎
議 題「ヨーロッパの教会等で観る壁画・天井画等の意味をスライドで見
る」棚橋恵津子氏

第 250 回 2002/09/27

出席者 野々内、内海、寺田、柴田、岡野、宗像、塚本、佐野、宅間正夫、
小川甲子、西岡、寺西、川崎
議 題「欧州で研究されているベーシック・インカム」佐野会員

第 300 回 2007/06/29

出席者 有岡、岡野、小川甲子、岡部陽二、川崎、佐野、四反田、柴田、
塚本、寺西、西岡、根来、野々内、筆谷、宗像
議 題 自由討議、岡部陽二会員が日本工業倶楽部会誌に発表した「教育
改革論」をテーマに議論
川崎幹事の東電退職に伴い事務局機能が失われたので、新幹事団（西岡

稔、岡部陽二、根来泰周)で運営開始、岡部が事務局機能を担当、議事録作成とりやめを決定。

第 350 回 2012/1/27

出席者 有岡、内海、岡部陽二、川崎、佐野、四反田、柴田、宅間、谷本、手島、寺西、西岡、野々内、三露、吉田

演題 「マスメディアから見た福島原発事故」 元朝日新聞論説委員・武部俊一氏

第 400 回 2016/11/25

出席者 有岡、岡部敬一郎、岡部陽二、四反田、柴田、宅間、谷本、寺西、宗像、吉田

演題 「打開できるか日ロ関係？」 日ロ文化センター代表・川村秀氏

第 404 回 2017/9/29

出席者 有岡、内海、岡野、岡部陽二、柴田、宅間、谷本、野々内、三露、吉田

演題 「人生は『私の履歴書』が教えてくれた」 吉田勝昭会員
会員数の減少により、講師を招いたり会員が発表する勉強会形式での本会運営は継続困難となったので、本年末をもって霞会館での会合は終了、来年以降は偶数月の昼食時に集まることに決定。

第 405 回 2017/11/24

出席者 有岡、内海、岡野、岡部陽二、小笠原、四反田、柴田、宅間、谷本、寺西、

演題 「日本とドイツ」 元駐ドイツ大使・高島有終氏

第 406 回 2017/12/15

出席者 内海、岡野、岡部敬一郎、岡部陽二、小笠原、柴田、宅間、谷本、寺西、野々内、三露、吉田

霞会館での最終の忘年会

(250 回までは小林功会員の記録により、それ以降は岡部陽二会員の資料により作成)

編集後記

エルエフ会は1975年9月11日に第一回会合を開いて発足、2017年12月15日に勉強会形式での会合を終結するまで、じつに42年3か月にわたり406回に及ぶ会合を重ねてきた。

第3回会合以降、開催日は毎月の最終金曜日の夕刻と定め、この原則をおおむね貫いてきたのが、継続の力となったのであろうか。

メンバーは当初の6名からピーク時には20名を超えたが、現在は18名。物故者13名と中途退会者20名を含め累計51名が会員となっていた。初回と最終回ともに出席は野々内隆さんお一人のみながら、会員の出入りは少なく、30年以上の永年勤続者が現会員の過半数を占める。

この会は創設当初から様々なバックグラウンドを持つ同世代が集まって、多岐にわたるテーマの楽しい勉強の場にしようという合意のもと、企業人だけでなく、官界、法曹界、マスコミなど幅広い分野の異業種交流を図ってきた。

この由緒あるエルエフ会の活動を振り返って文集を出してはとの提案がありイニシャル・メンバーの小林功さんから提供いただいたお手持ちの資料を基に活動年譜「エルエフ会の歩み」と「エルエフ会会員異動」を加えることができたのは幸いであった。

岡部陽二 記

